

岩崎純一歌集		『新純皇余情和歌集』>雑の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしぶ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、長光たき、戸井留子、武田あさゑ、蝶子、沙月式部、雪実少納言、岩崎純一（自釈）				
作者サイト		http://iwasakijunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakijunichi.net/waka/				
自撰日	雑の題	歌 岩崎純一歌	通釈	語釈	他歌人欄(評)	他歌人欄(派生歌など)
2008/5/12	鬱	つれづれに心の果てをたづぬれば むなしき空を落つる春雨	物思いに沈んで、心の落ち着くところを探していると、虚空を春雨が落ちてゆくことである。			
2008/5/12	月前述懐	かねて思ふ心ながらに行く道はいづ この月もあはれとぞ見る	前々より間違っていないと思っている心のままで自分らしく生き、進んでゆく道であるならば、どの道の途中で見る月も、感慨深く見えるもの			
2008/6/15	人間	一庭(ひとつには)のけはひ保たむ道が ためたただ一枝(ひとえだ)を涙に	庭全体の趣を保つがために、ただ一本の枝を、涙ながらに切り落とした庭師であったよ。			
2008/6/16	不言益荒男	益荒男が物言はで言ふそのほどは 山の頂(いただき)海の底	男が物を言わないでその目で語るこの程度というものは、山の頂のように気高く、海の底のように奥深いものである。	◇対句「山の頂//海の底」	◆和歌らしく誇張された表現だが、勇壮な誇張表現(園井長光) ◆余情妖艶美を真骨頂とする御作の中にあつて、珍しいが、矛盾しない(武田)	
2008/6/19	奇明星我嘆	明星(あかぼし)に益荒男あれば燃ゆる らむこなた少なき火を嘆くとて	明けの明星が燃えるように明るいのは、あの星に真の男がいるからか。この地球には真の男が少ないのを、遠くから見ている、真の男が。		◆前作同様に、ダンディズム的な誇張表現で、三島由紀夫的、聖セバスティアヌス的でもある。 (長満たき)	
2008/6/23	人品	花は似て実とはがふこそ人にあれ 花実たがふを桜とやはいふ	容貌は似通っていて中身が違うのが人間というものであるが、花と実とが一致していない植物を桜と言うであろうか。つまらない人間以外の森羅万象は、花と実とが一致しているのである。			
2008/7/7	益荒男	益荒男が心の奥を君問はば君がさ となる夜半の瀧つ瀬	日本男児の心の奥を貴女が私に問うならば、貴女の里にある、激しい流れの瀬が、夜中にとどろいては消えてゆくのを思ってくればよい。	◇掛詞「里×颯と」 ◇参照「袖の上も恋ぞつもりて淵となる人をば峰のよその瀧つ瀬」(定家)	◆定家歌の変化とも取れ、意図的な誇大表現であるにせよ、「瀧つ瀬」の巧みな生かし方に驚嘆させられる。 (園井長光)	
2008/7/7	世	山々に峽(かひ)あるものを世の中に たかきいやしきかひはあるやは	高い山々があるから谷があるのであるが、恋や出会いをするに当たって、身分が高いも低いも何のためにならうか。	◇掛詞「峽×甲斐」		
2008/12/8	言葉	言の葉の余情(よせい)は由良の砂(いさご) にてさりとも頼む人の心を	言葉や和歌の余情というものは、由良の浜の砂のように儂いものであるが、それでも、それを発する人間の心というものを信用して試みる			
2009/1/12	松	霜ののち雪のうちは更なるに春 秋間はぬ松の千年(ちとせ)よ	古い漢詩の通り、霜が降りた後や雪が降った中であつて松の色が変わらないのは言うまでもなく、元より季節を問わず千年と続く松の色よ。	◇対句「霜ののち//雪のうち」 ◇参照「十八公采霜後露 一千年色雪中深」(源順『類聚句題抄』)		
2009/7/22	竹	をちこちの竹の端山に吹き合へる秋 風的首篠笛の声	人里に近いこの山のあちこちの竹の林に、秋風の吹く音と、誰かが篠笛を吹いている音とが、美しく混じり合っている。			
2009/8/18	返し	知らざりき我が身ばかりと思ひしを 同じ月夜にながめふるとは	知らなかった。この辺りにばかり長雨が降って月が霞み、自分ばかりが物思いに涙していると思いきや、貴女も同じ夜の景色に同じ心を過ごしているとは。	◇掛詞「長雨×眺め」	◆元の本歌に対して返された歌。これにさらに数人が返した(右)。 (武田あさゑ)	◆本歌未掲載 ◆ながめせし同じ月夜の白雲の知らざりきとは我が身恥づかし
2009/8/19	苔	山人の庵のけはひも知らるかし八 重八重続く苔のきざはし	この先にある仙人の質素な家の様子もおのずと感じられる。何重もの苔がむしっている何段もの石段を見ると。			
2009/8/27	魚	大空は青き鱗の鯛雲今日はあまた の漁りなるべし	大空には、青い鱗のような鯛雲が出ている。今日は大漁であろう。		◆「青き鱗の」と言つて、本当の海の鯛のイメージもきらめき ◆空と海とが反照し合うかのような壮大で魅力的な現象を、みごとに歌にされた(水垣久) ◆まことに「青色と銀色に満ちた」壮大な歌。	
2009/9/10	獣	間に鳴る猿の渡りの木々の声影こ そ見えね神さぶる杜	猿たちが木々を渡り動く音と声、間に鳴り渡る。姿こそ見えませんが、神々しい杜であることよ。		◆闇夜に山から聞こえる音というのはそれだけでも神秘的な感じのするもの ◆神の使者ともされた「猿の渡り」の響きには凄み ◆目に見えない「神さぶる杜」のイメージが迫力(水垣久)	
2009/9/29	褥	今はかく過ぎし橘したふとも残る褥 に直香(ただか)をぞ聞く	今は過ぎってしまった橘の花の季節をこうして慕ってみても、あとに残された褥に移り残った香りを聞くばかりである。		◆「直香」とは、「確かにその人がいたと思われる空気感」を指す語といつてよく、実質的には橘の色香と異性の色香とが交錯する豊麗・濃厚な恋歌の趣。 (長満たき)	

2009/9/29	山	片付けばなほとほしき丈姿(たけすがた)月より高くそびく山の端	近づけば、いっそう雄大な姿よ。月よりも高くそびえ立つ山の稜線の鋭さよ。	◇参照 「雪をおきて梅をな恋ひそあしひきの山片付きて家居せる君」(『万葉』)	◆「片付く」は、万葉集などに「山片付きて」などとあるのに由る ◆接近すれば接近するほど、ますます「とほしき」(安易に訳したくない語ですが、普通は「壮大な、雄大な」)山の姿 ◆「月より高くそびく」とは妙絶たる表現	
2009/10/26	川	空蟬の同じ我が身と水無瀬川浅瀬の水脈(みを)にうつるもみぢ葉	この儚い世の我が身の境遇と同じものに見える。水無瀬川の浅瀬の水脈に、映り込みつつ散っては流れに乗る、紅葉の葉は。	◇枕詞 「空蟬の一身」 ◇掛詞 「水無瀬×見なせ」「映る×移る」	◆「水無瀬川」に「見(あるいは「見なし」)」を掛け、川の浅瀬に映っている紅葉と、それを眺めている我が身を「空蟬の同じもの」と観じている ◆「うつる」は「映る」の意に「移る」すなわち葉が衰え散りゆくことも暗示して、無常の心 ◆物の像を映すという川の一つの本意から、意表を突くような発想に、目をみはる思い ◆「水脈」は舟の通り路で、水深が深くなっているところを言うのが普通 ◆紅葉を「我が身と」同じと見なすよりも、我が身を紅葉と同じと見なす、とした方が情趣はまきえる	◆空蟬の身は同じきと水無瀬川浅き水面にうつるもみぢ葉 ◆空蟬の身は同じきと水無瀬川浅き鏡にうつるもみぢ葉(水垣久) ◆空蟬の同じ我が身を水無瀬川浅瀬の水脈にうつるもみぢに(戸井留子)
2009/12/5	市	さびしくも暮れゆく年の慰みや雪よりしるき市人(いちびと)の声	寂しくも暮れゆく一年の、最後の慰みであるよ。雪よりも白く明るく響く、市場の人々の声。	◇「しるしく」>「しるし」	◆アハレさやうがたさ 一首の眼目は「雪よりしるき」 ◆積もった雪の眩いばかりの白さと、市人の際立つ声音が響き合う ◆共感覚的表現が新鮮な感性を呼び起こすだけでなく、「しるし」が一瞬に語源を遡って「しるし」と一体になる面白さ(水垣久)	
2010/1/10	名所	杉の葉も行き交ふ人もかすみつつ雪降り巡る逢坂の関	降り巡る雪に、杉の葉も行き交う人も霞んでいる、逢坂の関。	◇歌枕 「逢坂の関」 ◇参照 「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」(蟬丸) 「杉の葉しるき」(後鳥羽院) 「嵐ぞかすむ」(宮内卿)	◆それとなく匂わせる本歌取りが上品 ◆後鳥羽院(杉の葉しるき)や宮内卿(嵐ぞかすむ)の名歌もはるかに思われ、余情を深めつつ、名歌巡りの名所歌といった楽しい趣(水垣久)	
2010/1/10	田園	千町田(ちまちだ)やなべて嬉しきなりはひに鍬打ち返すをちこちの音	一面に稲が実り生る広い田よ。季節は巡り、百姓たちが鍬を打ち返す音が、あちこちから聞こえる。嬉しさに満ちた生業よ。	◇掛詞 「生業×(稲が)生り」	◆広大な田園のあちこちから響いてくる、田畑を耕す鍬の音 ◆農作業の始まりの時を詠む、しかも景色でなく音で、という着想がまず素晴らしい ◆調べが美しく、鍬を打ち返す音も喜びに満ちて聞こえ ◆田作りの尊さに対する讃美の詞	
2010/3/17	楽	舞ふ袖も風に鳴り合ふ琴の緒のながき夜も飽かぬ巫女神楽かな	成人した巫女たちの舞う袖が風に乗って、美しくそい合い、琴の音も鳴り重なる。琴の緒のように長いこの夜にも飽きない美しさの巫女神楽よ。	◇掛詞 「成り合ふ×鳴り合ふ」 ◇序詞 「～琴の緒の」	◆風と交響する琴の音を出して、その「緒」から「ながき」を導いて来るという技巧に見どころがある ◆有一節様(水垣久)	◆巫女神楽に奉呈
2010/3/17	懐旧	書きすさぶ言の葉種(ぐさ)もえも捨てず是(こ)を見むのちの昔語りに	ただのすさびに書いた言葉や和歌の草稿も、捨てられない。これらを見るかもしれない、将来の昔語りの時間を思うと。	◇参照 「やまとうたは人の心を種として」(『古今集』「仮名序」)	◆歌になりきれなかった書きすさびもやはり惜しまれて捨てずに置く ◆将来これを見た時に思い出話の種にもなろうから ◆未来から今を見つめ返した懐旧歌という発想が面白い(水垣久)	
2010/4/19	夢	春の夜に袖を返して夢見草うつつに逢ふも花ばかりなり	春の夜、会いたい人に会える夢を見たいと思って袖を返して寝る。だが、夢にも、目覚めた現実にも、会えるのは桜の花ばかりである。	◇掛詞 「夢見(る)×夢見草」 ◇「夢見草」:桜	◆夢で恋人に逢えることを願って寝入ったところが、実際にあらわれるのは桜の花ばかりということで、皮肉な面白みがあり、かつ春の夢の耽美的な気分も横溢するという贅沢な一首(水垣久)	

2010/4/19	無常	昨日まで目前(まさか)の色と光りしを今宵の空ぞ蛍むなしき	昨日まで目前に光っていた蛍の色も、今夜の空にはむなしくも消え果てた。		◆乱舞していた緑色の光が、ある夜を境にぱったり見えなくなり、ただ五月闇に覆われた空が残る ◆「今宵の空ぞ蛍むなしき」とはよくぞ言われたもの(水垣久)	◆仏前に奉納
2010/6/10	述懐	花も人も塵の末だに捨てがたし今は限りの我を思へば	どんなにつまらない花や人でさえ、見捨てがたいと思う。もうすぐ終わる我が人生を思えば。			◆仏前に奉納
2012/1/17	祝	永久(とは)の香の梅もあるべし今や世の中は睦月に咲くと聞こえて	永久の梅の香りもあるのだろう。今、二人の仲が一月に実ったと聞いて、梅の花も早くも一月から咲き続けるような気がするのだ。			◆知人の婚礼祝いに奉呈
2012/2/8	人	夕暮れはにほふばかりの音にて花ほど人は変はらざるなし	昔のまま変わらないものは、夕暮れに匂い咲く花のみであって、人間の変わり様は花とは比べ物にならないのである。			
2012/2/21	時	昨日今日かをりし時をかへり見る嵐ののちの明日葉(あしたば)の花	つい昨日まで、いや、今日先ほどまで、香っていた時を思い出す。今は嵐に散ってしまい、明日からは咲かない明日葉の花が。	◇掛詞「明日×明日葉」		
2012/2/21	時	憂き心歩みとまれる道の空を音にむかふ夕暮れの月	憂鬱な心のために歩みが止まった道中、昔の良き日へと帰ってゆくように、空に月が昇る。			
2012/9/26	星	花思ふ涙うつろふ大虚(おほぞら)に忘れ形見の彦星の影	花のような日々を思う涙さえ移ろってゆく空虚で空しき虚空に、忘れきれない彦星の姿が霞んで見えます。	◇「大虚」：たいきよ。「太虚」とも。元は古代中国の宇宙観における語で、『日本書紀』などに既出。和語で「おほぞら」と読まれる。 ◇掛詞「忘れ形見×忘れ難(し)」		◆「伝統和歌+CG画像」の試み(3)
2012/12/16	世	寄せてまた返す返すもさだめかほみるめなぎさのよその波風	寄せては返す波のように栄枯盛衰を繰り返すのが、かえすがえすも世の常であるのか。海藻無き渚のように、再び日の目を見る目も無く去る者をよそに、新しき波風が騒ぐ世間よ。	◇掛詞「(波が寄せては)返す×返す返すも(改めて、実に)」「海松藻×見る目」「渚×無き」 ◇本歌取「氷あるみるめなぎさのたぐひかは」 ◇本歌取「おほけなくうき世の民におほふかなわが立つ袖に墨染の袖」(慈円『千載』) ◇語「籠を破る」(浄瑠璃用語。近松門左衛門『氷朔日』) 「民の籠」(『煙たつ民の籠はにぎはひにけり』『和漢朗詠集』)	◆政権交代の様相を詠む。今回は、「みるめなぎさ」は民主党惨敗、「よその波風」は自民党旋風と言ったところか。(自注)	◆第46回衆議院議員選挙結果に掛ける
2012/12/21	世	おほけなく世を浮雲と思ふかな自(みづか)ら民の破る籠(かまど)に	恐れ多い意見ながらも、この世を憂き浮雲のようだと思ってしまうことだ。我々日本人が自らの手で壊し続ける日本国の生活・文化・社会を見るにつけて。		◆「自ら」「民」の語と字は、自民党圧勝の結果に掛けて用いた。(自注)	◆第46回衆議院議員選挙結果に掛ける